

森本三義

Interviewer

進研アドBetween編集長
長田雅子

創立当初からの理念である 三実主義を今に生かして 社会人基礎力を育む

地域の期待を受けて創立し、地域における役割を果たし続けてきた松山大学。近年は、薬学部を開設し、文系学部と理系学部の両輪を備えた「真の総合大学」をめざす。森本三義理事長・学長に、これまでの歩みと今後の展望を聞いた。

現代の教育に通じる「三実主義」

長田 貴学は2013年に創立90周年を迎えられます。創立期のエピソードなどをお聞かせください。

森本理事長・学長（以下、森本）

松山大学は、「四国に冠たる高等商業学校を」という地元の要望に応え、1923年に松山高等商業学校として創立されました。創立には本学の「三実人」とされる新田長次郎翁、加藤恒忠翁、加藤彰廉先生の多大な尽力がありました。巨額の私財を創立資金として提供された新田長次郎翁は、『坂の上の雲』に登場する陸軍大将・秋山好古と懇意な間柄であり、秋山好古が写っている開校式の写真も残されています。

長田 創立時から教育の理念として「三実主義」を掲げています。この理念について教えてください。

森本 「三実主義」は、加藤彰廉先生が創唱された理念で、「三実」とは真実、実用、忠実の3つの「実」を言います。真実は真理を求める態度を、実用は追究した真理を生活において生かし、社会に奉仕することを意味します。また、大学教育の場においても、実社会に出てからも、個人と個人の信頼関係は重要です。忠実とは、この信頼関係を確立する根本的な精神を示しています。

教育には知育・徳育・体育という3本の柱があり、これらをバランス良く行わなくてはなりません。「三実」のうち真実と実用は、知育の指針を表しています。そして、忠実の精神は徳育の指針を示しているのです。

本学はスポーツ活動やサークル活動

に力を入れています。これは体育の領域に該当します。現在、スポーツ分野で顕著な成績を挙げているのは、2010年の全日本大学女子駅伝で4位に入った女子駅伝部です。もともと本学には男子学生が多く、伝統的にバンカラな気風があったのですが、近年は女子学生が増え、勉学やスポーツ、さらに卒業後も女子の活躍がめだちます。女子駅伝部はその象徴と言えるでしょう。

草創期から続いてきた社会人基礎力の育成

長田 教育の特徴の一つとして、社会人基礎力の育成に力を入れていらっしゃると思います。これはどのようなお考えからですか。

森本 「三実主義」に基づく教育は学問・研究に必要な力や倫理観の涵養、体力の向上につながります。これらは、学生が社会で活躍するために必要な能力です。本学は、2009年度に経済産業省の「体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業」のモデル事業委託校に選定されましたが、社会人基礎力とされる力は、創立時から教育の理念に基づいて育成をめぐっていました。今後も三実主義に基づく教育を継続したいと考えています。

私たちが学生だった頃は、「これからどう生きるか」ということを常に考えていました。今の学生は恵まれた環境に育ち、目的意識が希薄な者も多いように思います。だからこそ、社会人基礎力の育成が求められているでしょう。

長田 具体的にはどのような方法で社

会人基礎力を身に付けさせようとしているのでしょうか。

森本 「松山大学社会人基礎力育成事業」として、さまざまなプロジェクトを展開しています。この中には、学生が企業や自治体と連携して、商品開発や地域活性化を図る取り組みがあります。

愛媛県は柑橘類の栽培が盛んな土地です。そこで、市内の農産物販売会社と提携し、松山産のライムを使った「松山ライムサイダー」を学生主体で開発しました。愛媛県が昨今、栽培に力を入れているイタリア原産のブラッドオレンジからは、「えひめオレンジサイダー」ができました。その他、産学官が連携して、松山市や私の出身地である内子町と協定を結び、地域社会への貢献をめざしています。

このような取り組みを通して、学生にはできる限り、自分たちで課題を発見し、解決するという経験をさせたいと考えています。これは医学や薬学の分野における「臨床」に近いものです。これからは、文系学部も文献主体の座学だけでなく、現場に根差した臨床的な教育・研究に力を入れていくべきです。

長田 貴学は「学生のために」という方針を徹底されていると伺っていますが、具体的な内容を教えてください。

森本 それは、安く抑えた学費や「就職に強い大学」という評価に表れています。2009年度の私立大学の初年度納付金全国平均は約131万円ですが、本学の文系4学部の初年度納付金は98万円です。この額は、経済状況と18歳人口の減少に伴って変化する競争環境を考慮して、戦略的に設定したものです。



もりもと・みよし 1952年愛媛県生まれ。1977年松山商科大学（現松山大学）大学院経済学研究科修士課程修了。1981年大阪大学大学院経済学研究科博士課程単位修得退学後、松山商科大学経営学部講師、助教授。1987年にテキサス大学オースティン校へ留学。帰国後、松山大学経営学部教授、学校法人松山大学評議員、理事（財務担当）、常務理事（教学担当）を経て、2007年から現職。専門は会計学。

また、「就職に強い大学」という評価にも表れています。これは地域に優秀な人材を送り出してきた実績によるものだと考えています。愛媛県内や松山市内の企業では本学出身者が多く働いており、トップとして活躍している方もたくさんいらっしゃいます。多くの優秀な卒業生の活躍が本学の財産となり、就職に有利に働いているのです。

日本経済は厳しい状況が続いていますが、これまでに築いてきた実績と人脈が、高い就職率につながっているのだと思います。

伝統を継承しながら真の総合大学をめざす

長田 「西日本屈指の私立総合大学をめざす」というお考えがあると同っています。創立90周年を控え、また100周年を見据えて、どのような形で実現させていくおつもりでしょうか。

森本 2006年度の薬学部設置は、「文系学部と理系学部という両輪を備えてこそ真の総合大学である」という思い

から私自身が提案し、実現に至ったものです。

現在、薬学部の定員は1学年100人程度です。総合大学とはいえ、理系学部はまだ規模が小さい。今後はチャンスがあれば、薬学部を中心にコ・メディカル*分野の学部・学科を充実させたいと考えています。ただし、本学の前身は松山商科大学であり、長い伝統のある文系学部は、今後も大学を支える屋台骨となるでしょう。商科大学としての伝統を引き継ぎながら、新たな伝統を付け加えていきたいと思っています。

長田 松山という地に大学があることについては、どのようにお考えでしょうか。

森本 松山は教育熱心な土地柄です。地域の方々は学生に対して非常に理解があり、温かく見守ってくれます。私自身もそうでしたが、昔は苦学生が学べる環境を求めて松山大学に集まってきたものです。そうした学生たちが卒業後に、地域で立派に活躍しています。大学としても、今後も教育に適した環境の維持に力を尽くしたいと考えています。

*医師と協同する薬剤師や理学療法士などの医療従事者